

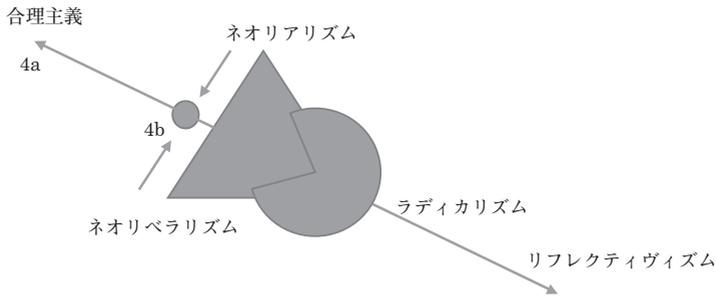
国際政治の変化を見る眼（下）

島 村 直 幸

六 変化とコンストラクティヴィズム

国際システムのレベルの構造的要因にばかり注目するネオリアリズムとネオリベラリズムを特に批判するコンストラクティヴィズム（構成主義、構築主義）は、ユニット・レベルの規範やアイデンティティ、アイディア、思想などの要因に注目し、国際システムの構造とユニットの間の“リフレクティブな”相互作用の変化を説明しようと試みる。国際システムの構造は、ユニットとの相互作用を絶えず繰り返し、再構築されていく、と想定されるのである。規範やアイデンティティ、アイディア、思想の“間主観的な(inter-subjective)”ダイナミズムを重視する。こうしてコンストラクティヴィズムは、ダイナミックな議論を展開する。国際協力の可能性をめぐって、相対的利得がより重要か、それとも絶対的利得がより重要かで「ネオ・ネオ論争」を繰り広げていたネオリアリズムとネオリベラリズムが、現実の冷戦の終結という国際システム上の変化を説明できなかったことを批判して、コンストラクティヴィズムのアプローチがにわかにな盛んとなった。ただし、コンストラクティヴィズムのアプローチは、既存のネオリアリズムとネオリベラリズムのダイナミズムのなさを批判する上では示唆に富むが、事例研究には不向きである、という指摘もある（Katzenstein ed., 1996）。

図6 ネオ・ネオ論争（と統合）とコンストラクティヴィズムとの論争



	第3の論争 (パラダイム間の ディベート)	第4の論争 (4a) (リフレクティヴィズム 対合理主義)	第4の論争 (4b) (絶対的利得 対相対的利得)
ディベート間の関係 の形態	比較不可能	戦争	リサーチ・プログラ ム内の相違
不一致のテーマ (あるいは内容)	世界観	哲学	解決されるべき実証 可能な問題
対立構図	3つのパラダイムの 鼎立状況	ネオ・ネオ統合 対ポストモダン	ネオリアリズム 対ネオリベラル制度論

出典：Weaver (1996 : 165, 167).

こうして、コンストラクティヴィズムは、これまで国際関係論であまり分析されてこなかった“目に見えない”部分に注目するのである。“目に見えない”部分に注目するという点では、自由民主主義を近代最後のイデオロギー形態とみなしたフクヤマの「歴史の終わり？」や、ハンティントンの「文明の衝突？」の議論、ナイの「ソフト・パワー」の概念も想起されてよいかもしれない (Fukuyama, 1992 ; Huntington, 1996 ; Nye, 1990 : chap. 6 ; Nye, 2004)。特にフクヤマとハンティントンの本は、きちんと読まれることがなく、ごく単純な言説がまかり通っている、と感じる。一般に理解されるよりも、複雑で慎重な議論を展開しているからである (軍事と経済、トランスナショナルの三つの次元から国際システムを捉える必要性を説くナイの

議論も、決して単純ではない。Nye, 2002)。

コンストラクティヴィズムの視角から、アメリカ外交を分析した稀有な先行研究として、ナウの『アメリカの対外関与』(二〇〇二年)が存在する。ナウによれば、冷戦後のアメリカ外交は、民主主義と資本主義、法の支配といったリベラルな価値観とアイデンティティを共有する国家との同盟や提携を重視すべきであるという (Nau, 2002)。

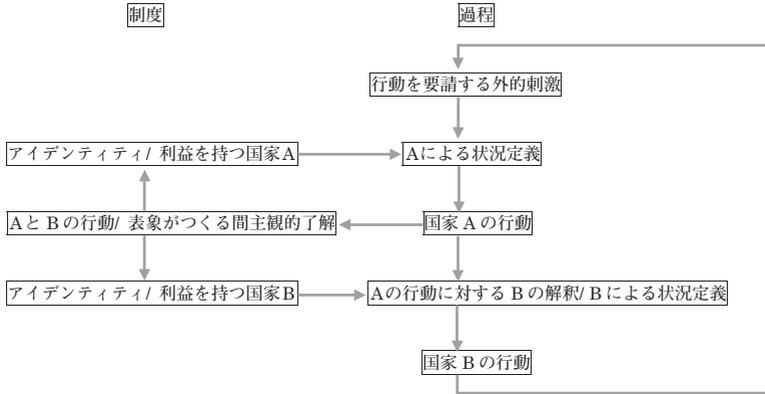
レボウとリッセ=カーペンらの論文集は、ネオリアリズムとネオリベラリズムの合理主義が冷戦の終結を予測できず、かつうまく説明できない点を厳しく批判し、コンストラクティヴィズムの視角から、冷戦の終結の変化とダイナミズムを説明しようとした。たとえば、ソ連のゴルバチョフ政権の対外政策に、西ヨーロッパ諸国のリベラリズムや軍備管理の規範が影響を与えた可能性について、ポジティブな議論を展開する (Lebow and Risse-Kappen, eds., 1995 ; Risse-Kappen, 1995)。

また第二次世界大戦直後、東ヨーロッパ諸国が、ソ連の赤軍の軍事的な圧力の下で、共産主義の政治体制をとることを強要され、共産主義のイデオロギーが、二度の世界大戦によって経済的に疲弊していた西ヨーロッパ地域にまで波及してくるのではないか、という脅威が冷戦をもたらしたと一般に理解されている。こうした見方に対して、コンストラクティヴィズムの立場から、冷戦の開始を論じたりッセ=カーペンは、ソ連が東ヨーロッパ地域を抑圧されたりジッドな勢力圏とせずに、緩やかな勢力圏として「フィンランド化」していれば、冷戦は起こらなかったのではないかと問題提起する (Risse-Kappen, 1996 ; 373)。

こうして、ナウやリッセ=カーペンらの研究は、コンストラクティヴィズムは事例研究が苦手だととらえられてきたため、きわめて貴重な研究だ、と評価することができよう。

また進藤榮一は、コンストラクティヴィズムのモデルを、ウェントらの議論を手がかりに、図7の通り、図式化している (Wendt, 1992 ; Wight, 2006)。

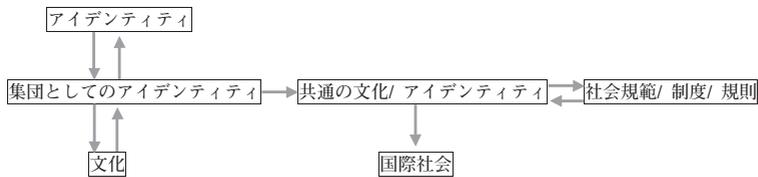
図7 コンストラクティヴィズムのモデル



出典：Wendt (1992) ; Wight (2006) ; 進藤 (2001, 206)。

さらに進藤は、ラギーの議論を手がかりに、文化と規範と国際社会を図8の通り、まとめている (Ruggie, 1998)。

図8 文化と規範、国際社会の相互作用



出典：Ruggie (1998) ; 進藤 (2001, 207)。

国際関係論の主要な論争は、コンストラクティヴィズムの台頭まで、大きく四つ存在した。それぞれの論争のテーマは、表15の通りである。第一の論争は、実体論をめぐって論争となったのに対して、第二の論争は主に、方法論をめぐって論争となった。これらの結果、国際関係論の主要なパラダイ

国際政治の変化を見る眼（下）

ムはリアリズムとなり、方法論として伝統主義ではなく科学主義が採用されるようになっていく。その後の第三の論争では、リアリズムとリベラリズム、グローバリズム（特に世界システム論）の三つのパラダイムが鼎立する理論状況が生まれた。ただし、主要な論争は、リアリズムとリベラリズムの間でなされ、グローバリズムのパラダイムは、リアリズムとリベラリズムの論争からは一定の距離を保ちつつ、独自の議論を展開した。論争外という意味では、ブルが『国際社会論』を刊行し、英国学派の流れを本格的に形成している。

第四の論争は、二つの論争が同時進行した。まずネオリアリズムとネオリベラリズムの合理主義の理論の間で、国際協力の可能性をめぐる論争が戦われた。次いで、合理主義の理論とコンストラクティヴィズムの間で、国際関係論の“哲学”をめぐる論争が戦われた。

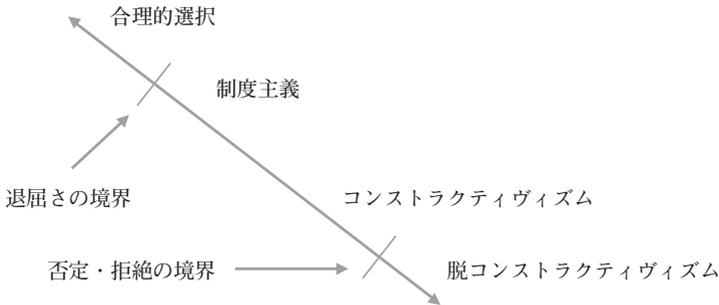
表 15 国際関係論（IR）の4つの論争のテーマ

	政治学	哲学	認識論	本体論（IRの性格）	方法論
第1の論争	xxx	xx		x	
第2の論争			xx		xxx
第3の論争	xx			xxx	x
第4の論争		xxx	xx	x	

出典：Weaver（1996: 157）；進藤（2001、162）。

特に一九九〇年代の論争の様相を図式化したものが、図9である。合理的選択のアプローチを突き詰めると、経済学や数学、物理学のようなモデルとなり、退屈さの境界を越えてしまう。他方で、コンストラクティヴィズムも行き過ぎてしまうと、否定・拒絶の境界を越えてしまう。こうした結果、両者の間で、建設的な論争の余地がなくなってしまうのである。

図9 1990年代の論争の様相



出典：Weaver (1996 : 169).

七 変化と英国学派

英国学派は、国際社会は主権国家から構成される無政府状態（アナキー）であるが、国際社会なりの社会性や秩序が存在する、と議論する。この点、先に見たブルの本のタイトルが、*Anarchical Society*となっていることが象徴的である（邦題は、『国際社会論』）。ブルをはじめとした英国学派は、外交や国際法、大国間政治、勢力均衡、戦争を国際社会の社会性や秩序を維持するための国際制度として捉える。また、主要な大国間で一定のルールや規範が共有されている場合を「国際社会」と位置づけ、近代の西ヨーロッパとオスマン・トルコとの関係のような一定のルールや規範を共有しないが、相互作用がある場合は、「国際システム」とただ位置づけ、区別した。思想的なルーツは、「国際法の父」グロティウスである（Carr, 1939; Butterfield and Wight, eds., 1966; Bull, 1977; Wight, 1991; Wight, 1995; Bull & Watson; Watson, 1992; Mayall, 2000; Buzan, 2014; Clark, 2005; Linklater and Suganami, 2006; Hurrell, 2007; Brown, 2015; Stern, 1995; ホフマン、二〇一一、第七章と第八章; 細谷、一九九八; スガナミ、二〇〇一; 山中、二〇一七a; 山中、二〇一七b）。

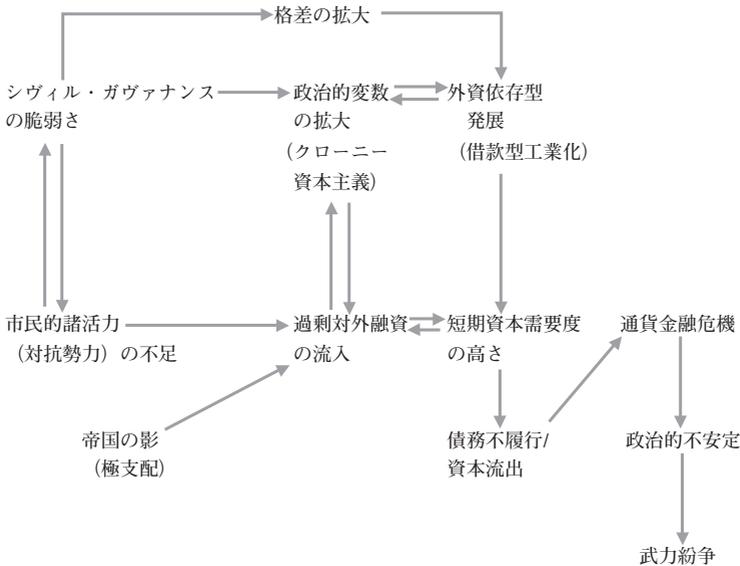
変化と英国学派だが、フランス革命や産業革命、ロシア革命の歴史的な意

義を重視する英国学派の議論は、基本的に静的な議論のリアリズム（特にネオリアリズム）とは区別されるべきであろう（ホフマン、二〇一一、第七章）。また一九世紀後半からの帝国主義の時代から二〇世紀の第二次世界大戦後までに、ヨーロッパやアメリカ、日本の植民地が「脱植民地化（decolonization）」を遂げた結果、国際社会が拡大したという議論も展開するので、ヨーロッパ中心の視角だが、変化を説明しようとする試みは見られる（Bull and Watson, eds., 1984）。

他方で、英国学派の国際社会論は、国家中心のアプローチだが、「政府なき統治（governance without government）」を論じるグローバル・ガヴァナンス論との親和性が高い、と思われる（Buzan, 1993）。両者のアプローチが、先に見た通り、国際システムの秩序のあり方や「統治」の側面に注目するからである。両者の相違は、後者が国家だけではなく、国際連合など国際機関、国際経済などの国際制度や国際レジーム、市民社会や非政府組織（NGO）、多国籍企業などトランスナショナルな主体、マスメディアレベルを相対的により重視するところである。

ストレンジは、『カジノ資本主義』などの著作で、国際政治経済学（IPE）という新しいアプローチの形成に貢献した。IPEは特に、政治と経済の問題領域が重なり合う側面に光を当て、国際政治の変化を説明しようとした（ストレンジ、一九八九；ストレンジ、二〇〇九）。アメリカの覇権安定理論のギルピンも、政治だけでなく経済への関心も高かったため、『国際関係の政治経済学』などを残していることも興味深い（Gilpin, 1987；Gilpin, 2001）。たとえば、進藤は、彼らの業績を手がかりにして、通貨金融危機の構造を図10の通り、まとめている。

図 10 通貨金融危機の構図



出典：進藤（2001、300）。

八 国際システムの変化を見る眼—分析レベルに注目して

これまで、タイトルにある通り、「国際政治の変化を見る眼」として、国際システムの“変化”に注目して、これまでの理論動向をまとめてきた。

ただし、ここで注意しなければならないのは、ギルピンが論じるように、国際システムそのものの変化なのか、国際システム上の構造の変化なのか、あるいは、より日常的なユニット間の相互作用のみの変化なのか、ということである。国際システムそのものの変化ならば、西ヨーロッパ地域で見た場合、古代の帝国秩序から中世のキリスト教共同体へ、もしくは中世から近代の主権国家システムへというパラダイム・シフトを意味する。歴史的に、滅多に起こる変化ではない。歴史上、まだ二度しか起こっていない。問題は、一部の経済学者が議論する通り、二一世紀に近代の時代が終わり、「新しい

表 16 国際システムの変化についての3つのレベル

システムそのものの変化 (systems change) …アクターの変化 (帝国、国民国家など)
システム上の変化 (systemic change) …システムの統治 (governance)
相互作用の変化 (interaction change) …国家間 (interstate) のプロセス

出典： Gilpin (1981 : 40).

中世」など、ポスト近代の新しい国際システムへと大きく変化するのか、ということである (Gilpin, 1981 ; 田中、一九九六 ; 水野、二〇〇七)。

こうした国際システムそのものの変化は滅多に起こらないため、国際関係論が重要視し想定する変化は、近代以降の、主に国際システム上の変化である。たとえば、第二次世界大戦の終結時とその直後や冷戦の終結を事例として取り上げるということは、国際システム上の変化を明らかにするということとなる。古典的リアリズムやウォルツ流のネオリアリズムならば、近代以降の「西欧国家体系」から「米ソ冷戦」へ、多極構造から双極構造へ、という変化である (Carr, 1939 ; Morgenthau, 1978 ; Schuman, 1933 ; Kissinger, 1957 ; Kennan, 1984 ; 高坂、一九六六 ; Waltz, 1979)。ギルピンの覇権安定理論やウォーラーステインの世界システム論では、まず覇権国の交代ということになる (Gilpin, 1981 ; ウォーラーステイン、二〇一三 ; ウォーラーステイン、二〇〇六)。

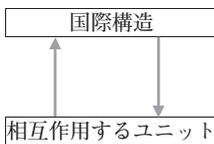
より日常的なユニット間の相互作用のみの変化ならば、外交上の駆け引きや妥協、主権国家間の同盟の組み換え、対立と協調などを意味する。国際関係論の外交史のアプローチは、こうした変化のうち、特に重要性が高いと思われる事例を取り上げ、その政策決定過程や有意義な国家間の相互作用を実証的に分析する。ここで「実証的に」と言った場合は、一次資料の裏づけで、問題仮説を証明していくことを意味する。

もっとも、広く知られている分析レベルはまず、ウォルツによる三つの分析レベルがある。すなわち、第一イメージが個人のレベル、第二イメージがユニット・レベル、第三イメージが国際システム・レベルである。これら三

つの分析レベルから、戦争の原因を分析したのが、ウォルツの古典、『人間、国家、戦争』であった (Waltz, 1954; 納家, 二〇〇二)。核抑止を重視するウォルツは、核兵器の存在の取り扱いはかなり悩んだようで、『国際政治の理論』以降の論文で、核兵器はユニット・レベルの問題だが、「システム上のエフェクトを持つ」と説明し直された (Waltz, 1986: 327-328, 343; セーガン・ウォルツ, 二〇一七; Craig, 2013)。

国際システム・レベルの構造に焦点を絞った議論を展開したウォルツだが、構造とユニット、“全体”と“個”との間の相互作用を見過ごしていたわけではないし (Waltz, 1979: 40)、『対外政策と民主主義の政治』を残している (Waltz, 1967)。ほぼ同じ時期には、ローズノー編の『国際政治と対外政策』の改訂版が出版され、国内政治と対外政策の“連関・連結 (linkage)”がいつ起こり、どのように起こるのかを明らかにしようと試みていることは無視できない (Rosenau, ed., 1969; 織, 一九八一)。さらにローズノーはその後、『政府なき統治 (*Governance without Government*)』を編集し、グローバル・ガバナンス論を展開するようになることも注目される (Rosenau and Czempiel, eds., 1993)。

図 11 ウォルツの国際システム論の前提



出典: Waltz (1979: 40).

こうしたウォルツの三つの分析レベルを部分修正したのが、ナイとウェルチの『国際紛争 [第一〇版]』(二〇一七年) である。ナイとウェルチは、国際システム・レベルに手を加えて、システム・レベルの「プロセス」を想定している。たとえば、同じ多極構造であっても、ナポレオン戦争後のウィーン

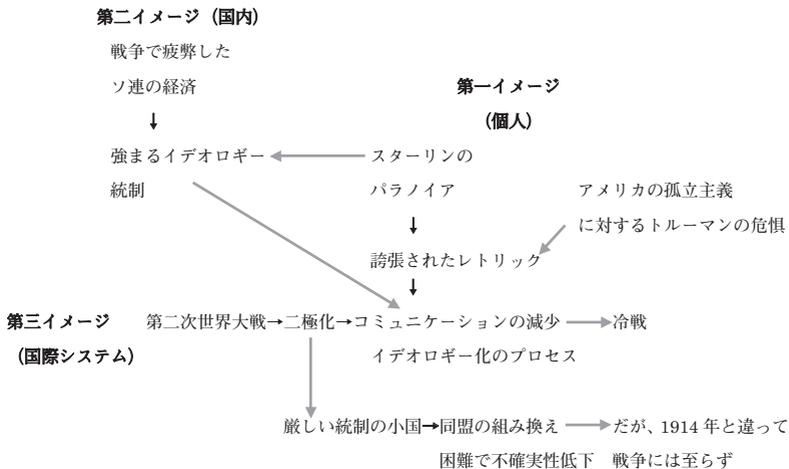
体制のように柔軟性に富んだ緩やかな多極なのか、第一次世界大戦直前のように膠着した多極なのか、で戦争が起こる蓋然性は大きく違ってくるというのである（Nye and Welch, 2016 : chap. 3）。カプランが国際システム論の古典で、緩やかな双極とリジッドな双極を区別していたことを想起させる（Kaplan, 1968）。ナイの分析枠組みの捉え方は、議論を複雑にしたが、現実をより正確に説明できる（Nye and Welch, 2016 : 50）。

たとえば、ナイとウェルチは、第一次世界大戦の勃発のプロセスを描く上で、第一イメージとして、指導者の個性、第二イメージとして、ナショナリズムの台頭、大衆の政治参加の拡大、国内の階級対立、拡張主義的なドイツの政策、オーストリア＝ハンガリーの崩壊、第三イメージとして、ドイツの国力増大、同盟の二極化を指摘し、これらの要因が複雑に連関し、システムのプロセスの柔軟性欠如、危機のエスカレーションを経て、一九一四年の戦争へと至ったと主張される。それぞれの分析レベルの要因が複雑に相互作用し、世界大戦へとつながるとされる。一つの分析レベルからの分析ではないのである。また、一九一四年に向けて、政策の選択肢の幅が狭まったことも指摘される。一九一四年の段階では、バルカン半島の小競り合いをきっかけに、世界大戦へとつながる国際環境が整っていた、ということになる（Nye and Welch, 2016 : 105）。

第二次世界大戦の勃発に関しては、第一イメージとして、ヒトラーの台頭、ヒトラーの企図、第二イメージとして、階級対立、イデオロギー政治、世界大恐慌、不十分な経済調整、宥和（appeasement）、第三イメージとして、未完の第一次世界大戦、ヴェルサイユ条約、米ソの孤立、不安定なバランスの要因が指摘され、一九三九年の戦争につながった、と主張される。ここでも、それぞれの分析レベルの要因が複雑に相互作用し、世界大戦へとつながるとされる。また、一九三九年に向けて、政策の自由度が狭まっていった、と主張される。一九三九年の段階では、ヒトラーの企図と不安定なバランスのため、世界大戦の勃発がほぼ不可避となっていた、と主張される（Nye and Welch, 2016 : 135）。

冷戦の開始を同じように、それぞれの分析レベルと国際システムのプロセスで説明すると、第一イメージとして、スターリンの paranoia、アメリカの孤立主義に対するトルーマンの危惧、誇張されたレトリック、第二イメージとして、戦争で疲弊したソ連、強まるイデオロギー統制、第三イメージとして、第二次世界大戦、二極化、コミュニケーションの減少、イデオロギー化のプロセスの要因が指摘され、それぞれ分析レベルの要因が複雑に連関し、冷戦につながった、と指摘される。ただし、厳しい統制下の小国、同盟の組み換え困難で不確実性低下へと至るも、一九一四年や一九三九年とは違って、世界大戦には至らなかった、という。たとえば、以上の内容を図式化したのが、図12である。

図12 冷戦の開始の原因



出典：Nye and Welch (2016 : 160).

帝国から脱植民地化へのプロセスを国際システム・レベルの趨勢やトレンドとして捉えることができる。またもう一つの趨勢ないしトレンドとして、特に一九七〇年代以降に、国境を越えて、相互依存がハイスピードで深化し

てきたことも忘れてはならない。田中明彦は、この趨勢的な変化によって、特に先進工業諸国間の国際関係は、「新しい中世圏」へと向かう、と予測した。ただし、「近代圏」や「混沌圏」は残る。二一世紀の国際システムは三層構造である、と想定されるのである（田中、一九九六、特に第七章）。こうした国際システムの趨勢的な変化は、ウォルツの国際システム論では取り上げられることはなかった。

古典的リアリズムとネオリアリズムは、近代以降のヨーロッパ地域を中心とした国際システムを、「西欧国家体系」の多極から米ソ冷戦の双極へ、そして冷戦後の単極から二一世紀の多極化へ、という流れで基本的に捉える。ただし、国際システム上の変化を説明するのは、リアリズムは苦手である。しかし、ネオリアリズムの一人、ギルピンは覇権安定論を展開したので、近代以降の国際システムは、経済的な要因を相対的により重視し、単極の覇権秩序がほぼ一〇〇年のサイクルで交代してきた（サイクル的な変化）、と議論した（Gilpin, 1981）。

ネオリアリズムは双極安定論であれ単極安定論であれ、いずれの議論も、ヨーロッパ地域を中心とした国際システムの構造、特に「力の分布」に注目しているのである。ところが、近代以降のヨーロッパの大国は、同時に帝国でもあった。すなわち、国際システムは、ヨーロッパ地域と非ヨーロッパ地域の二重構造なのであった（山影編著、二〇一二；木畑、二〇一四；田中、一九九四；田中、一九九五；田中、二〇〇八；田中、一九九八；納家、二〇一七；藤原、一九九八；藤原、一九九二；山本、二〇〇八）。

北大西洋条約機構（NATO）や日米同盟などアメリカの冷戦型同盟は、冷戦の終結という国際システム上の変化を経ても、冷戦後、生き延びた。冷戦終結の直後には、同盟不要論まで飛び出したが、アメリカの同盟は、ネオリアリズムが主張するように、国際制度として残存したのである（Keohane and Martin, 1995；McCalla, 1996；Duffield, 1994/1995；Thies, 1989）。また、コンストラクティヴィズムが示唆する通り、同盟国の国内規範に変化がないため、同盟は残存することになる（たとえば、Katzenstein, 1996）。さ

らに、アメリカの同盟は、「理念の同盟」ないし「価値の同盟」である（中山、二〇一三）。分析レベル上、同盟内政治は、サブシステムの要因として、捉えることが可能である。ネオリベラリズムが国際レジームや国際制度を、独立変数としての力の分布の変化と従属変数としてのアメリカの覇権の衰退との間に、媒介変数として設定することと似ている。英国学派が、勢力均衡や大国間政治などを国際社会の制度として捉えることとも関連しよう（Bull, 1977, part 2）。

ネオリアリストのウォルツが国際政治の理論から切り離した政策決定理論では、アリソンの三つのモデルが存在する。すなわち、第一に合理的選択モデル、第二に組織過程モデル、第三に官僚政治モデルである。第一の合理的選択モデルは、古典的なリアリストの議論を単純化したものにほぼ等しい。主権国家は、合理的かつ統一的なアクターであり、国益を合理的に計算して、対外政策の決定を行うとされた。第二の組織過程モデルは、たとえば、アメリカの場合、大統領府と国務省、国防総省など官僚組織の縄張り争いのなかで、それぞれの組織の標準手続き（SOP）に純粋に基づいた機械的な意思決定がなされると想定される。日本政治外交のように官僚組織の力が相対的に強い国家の場合は、比較的有効なモデルかもしれない。アリソンが最も重視したのが、官僚政治モデルであった。それは、またアメリカの場合であれば、大統領をはじめとして、大統領補佐官など側近、国務長官や国防長官、そしてその下の副長官や次官、次官補のレベルでの政治的な駆け引きから、妥協の産物として政策が生まれてくると想定された。重要な点は、それぞれのモデルは相互補完的に使用されるべきである、とされたことである（Allison and Zelikow, 1999；Halperin and Clapp, 2006；佐藤、一九八九、四八頁）。政策決定理論の日本での先駆者である佐藤英夫は、心理学的なアプローチを第四のモデルと位置づけ、表17の通り整理した。

表 17 政策決定論の4つのモデルの相互関連性

	第1モデル	第2モデル	第3モデル	第4モデル
(決定の主体)	国家または政府	政府内組織	個人的アクター	人間の認識（知覚） 機能
(決定のタイプ)	純粋に合理性に 基づいた決定	純粋にSOPに 基づいた決定	純粋に政治の産 物としての決定	純粋に人間の認識 （心理）に基づいた 決定
(決定過程)	知的プロセス	機械的プロセス	社会的プロセス	認識プロセス

出典：佐藤（1989、49）。

アリソンの三つのモデルの問題点は、第三モデルの官僚政治モデルの重要性が特に強調されたが、アメリカ外交の最終決定権を握る大統領の役割が他のプレイヤーとの違いであいまいな点が残っていたこと、またアメリカ議会の役割と影響力が想定されていないことであった（進藤、二〇〇一、九二—九四頁）。

またその後の政策決定理論では、パットナムの「二レベル・ゲームズ」のモデルが、一九八〇年代後半に登場した。パットナムは、国際交渉と国内交渉の二つの交渉テーブルを想定したのである。国内交渉で合意できる範囲で（つまり、特に議会が承認し得る範囲で）、国家の指導者たちは国際交渉に関与しなくてはならない。国内交渉で合意できない範囲では（つまり、特に議会が承認できない範囲では）、国際交渉の実現は最終的に不可能である、と想定された。こうして、パットナムのモデルでは、議会の影響力の要因が組み込まれているのである。パットナムは、国内交渉の合意の範囲を「勝利連合（win-set）」と呼んでいる。パットナムのモデルの注目すべき点は、この勝利連合の範囲が大きくなったり、小さくなったりすること、また国家は他国の国内政治でロビー活動（lobbying）を展開し、議会や世論に働きかけをできることを想定したことである。少ない変数で（「パーシモニアス」と言

う)、ダイナミックな政策決定理論のモデルを提示したのである (Putnam, 1993; 石田、一九九七、四五頁)。

以上のような問題意識から、国際システムのトレンド (や認知レベル) の要因も踏まえた分析レベルは、表18の通り図式化できる。

表 18 国際システムのトレンドの変化を含む分析レベル

国際システムのレベル…国際システムの構造、特に「力の分布」(多極か双極かなど)
国際システムのトレンド…帝国の論理 (帝国から脱植民地化へ)、 相互依存の深化 (グローバリゼーションの進展)
国際システムのサブシステム・レベル…同盟内政治の論理
国際システムのユニット・レベル…国内政治の論理 (特にアメリカ議会)
人間のレベル…主要な個人の要因
認知のレベル…主要な個人の認知 (心理) の要因

出典：島村 (2018、13)。

国際政治の変化を見る眼としては、第一に、特に国際システムそのものの変化か国際システム上の変化か、という問題がある。繰り返しになるが、国際システムそのもの変化は歴史上、滅多に起こらない。ネオリアリズムなどが取り上げるのは、国際システム上の変化である。第二に、それぞれの分析レベル上の要因が複雑に関連し、国際政治の変化をもたらすという点である。たとえば、二度の世界大戦や冷戦は、それぞれの分析レベルの要因が複雑に相互作用して、勃発や開始に至ったということである。第三に、国際システムそのものを変化させようとするような趨勢 (トレンド) としての変化がある。サイクル的な変化と区別される。帝国から脱植民地化へのダイナミズムや、相互依存の深化やグローバリゼーションの進展は、国際システムの趨勢的な変化である。

国際システムは、しばしば大きく変化する。問題は、その変化がどのレベルの変化なのか、ということである。

<参考・引用文献>

(Books)

- Allison, Graham T. and Philip Zelikow (1999 [1971]), *Essence of Decision: Explaining the Cuban Missile Crisis*, Second Edition, Longman.
- Baldwin, David A. ed., *Neorealism and Neoliberalism: The Contemporary Debate*, Columbia University Press.
- Bevir, Mark (2012), *Governance: A Very Short Introduction*, Oxford University Press.
- Brown, Chris (2015), *International Society, Global Polity: An Introduction to International Political Theory*, SAGA.
- Bull, Hedley (1977), *The Anarchical Society: A Study of Order in World Politics*, Macmillan.
- Bull, Hedley & Adam Watson, eds. (1984), *The Expansion of International Society*, Oxford University Press.
- Butterfield, H. and Martin Wight, eds. (1966), *Diplomatic Investigations: Essays in the Theory of International Relations*, Cambridge University Press.
- Buzan, Barry (2014), *An Introduction to the English School of International Relations*, Polity.
- Buzan, Barry and George Lawson (2015), *The Global Transformation: History, Modernity and the Making of Modern International Relation*, Cambridge University Press.
- Carr, Edward Hallett (1964 [1939]), *The Twenty Years' Crisis 1919-1939: An Introduction to the Study of International Relations*, Harper & Row, Publishers.
- Christensen, Thomas J. (1996), *Useful Adversaries: Grand Strategy, Domestic Mobilization, and Sino-American Conflict, 1947-1958*, Princeton University Press.
- Clark, Ian (2005), *Legitimacy in International Society*, Oxford University Press.
- Elman, Colin and Miriam Fendius Elman, eds., *Progress in International Relations Theory: Appraising the Field*, MIT Press.
- Fukuyama, Francis (1992), *The End of History and the Last Man*, Penguin Books.
- Gilpin, Robert (1981), *War & Change in the World Politics*, Cambridge University Press.
- Gilpin, Robert (1987), *The Political Economy of International Relations*, Princeton University Press.
- Gilpin, Robert (2001), *Global Political Economy: Understanding the International Economic Order*, Princeton University Press.
- Halperin, Morton H. and Priscilla A. Clapp with Arnold Kanter (2006), *Bureaucratic Politics and Foreign Policy*, Second Edition, Brookings Institution Press.
- Huntington, Samuel P. (1996), *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, Simon & Schuster Publishers.
- Hurrell, Andrew (2007), *On Global Order: Power, Values, and the Constitution of*

- International Society*, Oxford University Press.
- Kaplan, Morton A. (1968), *Macropolitics: Selected Essays on the Philosophy and Science of Politics*, Aldine Publishing Company.
- Katzenstein, Peter (1996), *Cultural Norms and National Security: Police and Military in Postwar Japan*, Cornell University Press.
- Katzenstein, Peter J., ed. (1996), *The Culture of National Security: Norms and Identity in World Politics*, Columbia University Press.
- Kennan, George F. (1984 [1951]), *American Diplomacy*, Expanded Edition, The University of Chicago Press.
- Keohane, Robert O. (1984), *After Hegemony: Cooperation and Discord in the World Political Economy*, Princeton University Press.
- Keohane, Robert O., ed. (1986), *Neorealism and Its Critics*, Columbia University Press
- Keohane, Robert O. and Joseph S. Nye (2011 [1977]), *Power and Interdependence*, Fourth Edition, Longman.
- Kissinger, Henry A. (1957), *A World Restored: Metternich, Castlereagh and the Problems of Peace 1812-1822*, Houghton Mifflin.
- Kissinger, Henry A. (1994), *Diplomacy*, Simon & Schuster Publishers.
- Kissinger, Henry A. (2015), *World Order: Reflections on the Character of Nations and the Course of History*, Penguin Books.
- Layne, Christopher (2007), *The Peace of Illusions: American Grand Strategy from 1940 to the Present*, Cornell University Press.
- Linklater, Andrew and Hidemi Suganami (2006), *The English School of International Relations: Contemporary Reassessment*, Cambridge University Press.
- Lobell, Steven E., Norrin M. Ripsman, and Jeffrey W. Taliaferro, eds. (2009), *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy*, Cambridge University Press.
- Mayall, James (2000), *World Politics: Progress and Its Limits*, Polity.
- Mearsheimer, John J. (2014 [2003]), *The Tragedy of Great Power Politics*, Updated Edition, W.W. Norton & Company.
- Modelski, George (1987), *Long Cycle in World Politics*, Macmillan Press.
- Morgenthau, Hans J. (1978 [1948]), *Politics among Nations: The Struggle for Power and Peace*, Fifth Edition, Revised, Alfred. A. Knopf.
- Nye, Jr. Joseph S. and David A. Welch (2016), *Understanding Global Conflict and Cooperation: An Introduction to Theory and History*, Tenth Edition, Pearson Education.
- Rose, Gideon (2010), *How Wars End: Why We Always Fight the Last Battle*, Simon & Schuster.
- Rosenau, James N., ed. (1969 [1961]), *International Politics and Foreign Policy: A Reader*

- in Research and Theory*, Revised Edition, The Free Press.
- Rosenau, James N., Vincent Davis, and Maurice A. East, eds. (1972), *The Analysis of International Politics*, The Free Press.
- Rosenau, James N., Kenneth W. Thompson, and Gavin Boyd (1976), *World Politics: An Introduction*, The Free Press.
- Rosenau, James N. & Ernst-Otto Czempiel, eds. (1993), *Governance without Government: Order and Change in World Politics*, Cambridge University Press.
- Ruggie, John Gerald (1998), *Constructing the World Polity: Essays on International Institutionalization*, Routledge.
- Russett, Bruce (1993), *Grasping the Democratic Peace: Principles for a Post-Cold War World*, Princeton University Press.
- Russett, Bruce and John Oneal (2001), *Triangulating Peace: Democracy, Interdependence, and International Organizations*, W.W. Norton & Company.
- Russett, Bruce (2017), *Triangulating Peace*, Forgotten Books.
- Schuman, Frederick, L. (1958 [1933]), *International Politics: The Western State System and the World Community*, Sixth Edition, McGraw-Hill Book Company.
- Schweller, Randall L. (1998), *Deadly Imbalances: Tripolarity and Hitler's Strategy of World Conquest*, Columbia University Press.
- Schweller, Randall L. (2008), *Unanswered Threats: Political Constraints on the Balance of Power*, Princeton University Press.
- Stern, Geoffrey (1995), *The Structure of International Society*, Pinter Publishers.
- Thies, Wallace J. (1989), *Why NATO Endures*, Cambridge University Press.
- Vasquez, John A. (1996 [1986]), *Classics of International Relations*, Third Edition, Prentice Hall.
- Wallerstein, Immanuel (2003), *The Decline of American Power: The U.S. in a Chaotic World*, The New Press.
- Waltz, Kenneth N. (1959 [1954]), *Man, the State and War: A Theoretical Analysis*, Columbia University Press.
- Waltz, Kenneth N. (1967), *Foreign Policy and Democratic Politics: The American and British Experience*, Institute of Governmental Studies Press.
- Waltz, Kenneth N. (1979), *Theory of International Politics*, McGraw-Hill.
- Wightm Colin (2006), *Agent, Structures and International Relations: Politics as Ontology*, Cambridge University Press.
- Wight, Martin, edited by Gabriel Wight and Brian Porter (1991), *International Theory: The Three Tradition*, Leicester University Press.
- Wight, Martin, edited by Hedley Bull and Carsten Holbraad (1995 [1978]), *Power Politics*, Leicester University Press.

- Wohlforth, William C. (1993), *The Elusive Balance: Power and Perceptions During the Cold War*, Cornell University Press.
- Zakaria, Fareed (1999), *From Wealth to Power: The Unusual Origins of America's World Role*, Princeton University Press.
- Ichihara Maiko (2017), *Japan's International Democracy Assistance as Soft Power: Neoclassical Realist Analysis*, Routledge.

(Articles)

- Buzan, Barry (1993), "From International System to International Society: Structural Realism and Regime Theory Meet the English School," *International Organization*, Vol. 47, No. 3, pp. 327-352.
- Doyle, Michael (1983a), "Kant, Liberal Legacies, and Foreign Affairs, part 1," *Philosophy and Public Affairs*, Vol. 12, No. 3, pp. 205-235.
- Doyle, Michael (1983b), "Kant, Liberal Legacies, and Foreign Affairs, part 2," *Philosophy and Public Affairs*, Vol. 12, No. 4, pp. 1151-1161.
- Duffield, John (1994/ 1995), "NATO's Functions after the Cold War," *Political Science Quarterly*, Vol. 109, No. 5, pp. 763-787.
- Grieco (1993), J.M., "Anarchy and the Limits of Cooperation," D.A. Baldwin, ed., *Neorealism and Neoliberalism*, Columbia University Press, pp. 116-140.
- Keohane, Robert O. and Lisa Martin (1995), "The Promise of International Theory," *International Security*, Vol. 20, No. 1, pp. 39-51.
- McCalla, Robert B. (1996), "NATO's Persistence after the Cold War," *International Organization*, Vol. 50, No. 3, pp. 445-475.
- Mearsheimer, John J. (1993), "Back to the Future: Instability in Europe after the Cold War," Sean M. Lynn-Jones and Steven E. Miller, eds., *The Cold War and After: Prospects for Peace*, Expanded Edition, The MIT Press, pp. 141-192.
- Modelski, George (1981), "Long Cycle, Kondraieffs, Alternating Innovations and Their Implications for U.S. Foreign Policy," C.W. Kegley and P.J. McGowan, *The Political Economy of Foreign Policy Behavior*, Sage Publications.
- Putnam, Robert D. (1993), "Diplomacy and Domestic Politics: The Logic of Two-Level Games," Peter B. Evans, Harold K. Jacobson, and Robert D. Putnam, eds. *Double-Edged Diplomacy: International Bargaining and Domestic Politics*, University of California Press, pp. 431-468.
- Risse-Kappen, Thomas (1996), "Collective Identity in a Democratic Community: The Case of NATO," Peter Katzenstein, ed., *The Culture of National Security: Norms and Identity in World Politics*, Columbia University Press, pp. 357-399.
- Gideon Rose (1998), "Neoclassical Realism and Theories of Foreign Policy," *World*

国際政治の変化を見る眼 (下)

- Politics*, Vol. 51, pp.144-172.
- Waltz, Kenneth N. (1993), “The Emerging International Structure of International Politics,” *International Security*, Vol. 18, No. 2, pp. 44-79.
- Weaver, Ole (1996), “Rise and Fall of the Inter-Paradigm Debate,” Steve Smith, Ken Booth & Marysia Zalewski, eds., *International Theory: Positivism and Beyond*, Cambridge University Press, pp. 149-185.
- Wendt, Alexander (1992), “Anarchy Is What States Make of It,” *International Organization*, Vol. 46, No. 2, pp. 391-425.
- Wight, Martin (1966), “The Balance of Power,” H. Butterfield and Martin Wight, eds., *Diplomatic Investigations: Essays in the Theory of International Relations*, Cambridge University Press, pp. 132-148.
- Wohlforth, William C. (2011), “Gilpinian Realism and International Relations,” *International Relations*, No. 25, pp. 499-511.
- Young, Oran (1994), *International Governance: Protecting the Environment Stateless Society*, Cornell University Press.

(本)

- アイケンベリー、G・ジョン (二〇〇四) (鈴木康雄訳) 『アフター・ヴィクトリー—戦後構築の論理と行動』 NTT出版。
- 猪口孝 (二〇一〇) 『ガバナンス』 東京大学出版会。
- ウォーラーステイン、I (二〇一三) (川北稔訳) 『近代世界システム (I～IV)』 名古屋大学出版会。
- ウォーラーステイン、I (二〇〇六) (山下範久訳) 『入門・世界システム分析』 藤原書店
- ヴァラダン、アルフレード (二〇〇〇) (伊藤剛、村島雄一郎、都留康子訳) 『自由の帝国—アメリカン・システムの世紀』 NTT出版。
- 浦野起央 (一九八九) [一九八五] 『国際関係論の再構成<全改訂版>』 南窓社。
- 大芝亮 (二〇一六) 『国際政治理論—パズル・概念・解釈』 ミネルヴァ書房。
- ガルトゥング、ヨハン、高柳先男・塩屋保・酒井由美子訳 (一九九一) 『構造的暴力と平和』 中央大学出版部。
- 木畑洋一 (二〇一四) 『二〇世紀の歴史』 岩波新書。
- 高坂正堯 (一九六六) 『国際政治—恐怖と希望』 中公新書。
- 高坂正堯 (一九八一) 『文明が衰亡するとき』 新潮社版。
- 高坂正堯 (一九七八) 『古典外交の成熟と崩壊』 中央公論社。
- 高坂生堯 (一九八九) 『現代の国際政治』 講談社学術文庫。
- 佐藤英夫 (一九八九) 『対外政策』 東京大学出版会。
- 佐藤英夫 (一九九一) 『日米経済摩擦 一九四五～一九九〇年』 平凡社。
- 島村直幸 (二〇一八) 『<抑制と均衡>のアメリカ政治外交—歴史・構造・プロセス』

ミネルヴァ書房。

進藤榮一（二〇〇一）『現代国際関係学—歴史・思想・理論』有斐閣。

ストレンジ、スーザン（一九八九）（小林襄治訳）『カジノ資本主義—国際金融恐慌の政治経済学』岩波書店。

ストレンジ、スーザン（二〇〇九）（井公人・櫻井純理・高嶋正晴訳）『マッド・マネー—世紀末のカジノ資本主義』岩波現代文庫。

セーガン、スコット、ケネス・ウォルツ（二〇一七）（川上高司監訳、斎藤剛訳）『核兵器の拡散—終わらなき論争』勁草書房。

田中明彦（一九八九）『世界システム』東京大学出版会。

田中明彦（一九九六）『新しい中世—21世紀の世界システム』日本経済新聞社。

土山實男（二〇一四）『安全保障の国際政治学—焦りと驕り [第二版]』有斐閣

恒川惠市（一九八八）『従属の政治経済学 メキシコ』東京大学出版会。

トゥーキューディデース（二〇一四 [一九六六]）『戦史（上中下）』岩波文庫。

納家政嗣、デヴィッド・ウェッセルズ編（一九九七）『ガバナンスと日本—強制の模索』勁草書房。

納家政嗣（二〇〇三）『国際紛争と予防外交』有斐閣。

納家政嗣、永野隆行編（二〇一七）『帝国の遺産と現代国際関係』勁草書房。

野林健、大芝亮、納家政嗣、山田敦、長尾悟（二〇〇七 [一九九六]）『国際政治経済学・入門 [第三版]』有斐閣。

藤原帰一（二〇〇二）『デモクラシーの帝国—アメリカ・戦争・現代世界』岩波新書。

藤原帰一（二〇〇七）『国際政治』財団法人放送大学教育振興会。

ホフマン、スタンレー（二〇一一）（中本義彦訳）『スタンレー・ホフマン国際政治論集』勁草書房。

山影進編著（二〇一二）『主権国家体系の生成—「国際社会」認識の再検証』ミネルヴァ書房。

山中仁美（二〇一七a）（佐々木雄太監訳、吉留公太、山本健、三牧聖子、板橋巧己、浜由樹子訳）『戦争と戦争のはざま—E・H・カーと世界大戦』ナカニシヤ出版。

山中仁美（二〇一七b）『戦間期国際政治とE・H・カー』岩波書店。

山本吉宣（二〇〇八）『国際レジームとガバナンス』有斐閣。

渡辺昭夫、土山實男編（二〇〇一）『グローバル・ガヴァナンス—政府なき秩序の模索』東京大学出版会。

（論文）

石川卓（一九九七）「世紀末における国際政治理論の状況」『外交時報』第一三三四号、八二—九七頁。

石田淳（一九九七）「国際政治理論の現在—対外政策の国内要因分析の復権」『国際問

国際政治の変化を見る眼（下）

題』第四四七号、特に四五頁。

- 石田淳（二〇〇〇）「コンストラクティヴィズムの存在論とその分析射程」『国際政治（特集：国際政治理論の再構築）』第一二四号、一一一―二六頁。
- 石田淳（二〇〇七）「序論 国際秩序と国内秩序の共振」『国際政治（特集：国際秩序と国内秩序の共振）』第一四七号、一一一―〇頁。
- 石田淳（二〇一四）「動く標的一慎慮するリアリズムの歴史的文脈」『国際政治（特集：歴史的文脈の中の国際政治理論）』第一七五号、五九一―六九頁。
- 市原麻衣子（二〇〇四）「〈書評論文〉攻撃的リアリズムによる戦争発生論の論理」『国際政治（特集：国際政治研究の先端 一）』第一三六号、一二八―一四四頁。
- 大芝亮（二〇〇七 [一九九六]）「国際政治経済の見方―理論的枠組み」野林健、大芝亮、納家政嗣、山田敦、長尾悟『国際政治経済学・入門 [第三版]』有斐閣、二四―六〇頁。
- 織完（一九七七）「アメリカの対外政策と国内政治」細谷千博、綿貫讓治編『対外政策決定過程の日米比較』東京大学出版会、一四七―一七八頁。
- 織完（一九八一）「相互依存と連繫政治理論」『国際政治（特集：相互浸透システムと国際理論）』第六七号、二九―四六頁。
- スガナミ、H（二〇〇一）「〈書評論文〉英国学派とヘドレー・ブル」『国際政治（特集：冷戦の終焉と六〇年代性）』第一二六号、一九九―二一〇頁。
- 田所昌幸（二〇〇三）「序章 国際関係の制度化」『国際政治（特集：国際関係の制度化）』第一三二号、一一―四頁。
- 田中孝彦（一九九四）「パワー・ポリティクスの変容と冷戦―冷戦の終焉が意味するもの」鴨武彦編『講座制機関の世界政治 五 パワー・ポリティクスの変容―リアリズムとの葛藤』日本評論社、六九―一三三頁。
- 田中孝彦（一九九八）「冷戦構造の形成とパワーポリティクス―西ヨーロッパvs. アメリカ」東京大学社会科学研究所編『二〇世紀システム 一 構想と形成』東京大学出版会、二一六―二五一頁。
- 田中孝彦（二〇〇八）「冷戦秩序と歴史の転倒―古いアメリカと新しいヨーロッパ」田中孝彦、青木人志編『〈戦争〉のあとに―ヨーロッパの和解と寛容』勁草書房、一七一―一九八頁。
- 田中孝彦（二〇〇九）「グローバル・ヒストリー―その分析視座と冷戦史研究へのインプリケーション」日本国際政治学会編（李鍾元、田中孝彦、細谷雄一編集責任）『日本の国際政治学 第四巻 歴史の中の国際政治』有斐閣、三七―五二頁。
- 田中孝彦（二〇〇一）「冷戦史研究の再検討―グローバル・ヒストリーの構築に向けて」一橋大学法学部創立五十周年記念論集刊行会編『変動期における法と国際関係』有斐閣、五二三―五四五頁。
- 田中孝彦（二〇〇三）「序論 冷戦史の再検討」『国際政治（特集：冷戦史の再検討）』第一三四号、一一―八頁。

- 中山俊宏（二〇一三）「『理念の共和国』が結ぶ同盟—国益と価値の共鳴と相克」公益財団法人日本国際問題研究所監修、久保文明編『アメリカにとって同盟とはなにか』中央公論新社、七七一—九四頁。
- 納家政嗣「国際秩序と帝国の遺産」納家政嗣、永野隆行編『帝国の遺産と現代国際関係』勁草書房、二〇一七、一一—二〇頁
- 藤原帰一（一九九二）「アジア冷戦の国際政治構造—中心・前哨・周辺」東京大学社会科学研究所『現代日本社会 七 国際化』東京大学出版会、三二七—三六一頁。
- 藤原帰一（一九九八a）「世界戦争と世界秩序—二〇世紀国際政治への接近」藤原帰一、東京大学社会科学研究所編『二〇世紀システム 一 構想と形成』、二六—六〇頁。
- 藤原帰一（一九九八b）「冷戦の終りかた—合意による平和から力の平和へ」東京大学社会科学研究所編『二〇世紀システム 六 機能と変容』東京大学出版会、二七三—三〇八頁。
- 藤原帰一（二〇〇一）「序章 比較政治と国際政治の間」『国際政治（特集：比較政治と国際政治の間）』第一二八号、一一—一頁。
- 細谷雄一（一九九八）「英国学派の国際政治理論—国際社会・国際法・外交」『法学政治学論究』第三七号、二三七—二八〇頁。
- 山本吉宣（二〇一八）「国際秩序の史的展開」『国際問題』第六六八号、三七—四五頁。